

お薬手帳の質の高い活用を推進するために～お薬手帳活用の質と患者特性分析～  
○岸本 桂子<sup>1</sup>, 北出 恵里花<sup>1</sup>, 瀧澤 久美子<sup>1</sup>, 福島 紀子<sup>1</sup>(<sup>1</sup>慶應大薬)

【目的】近年、お薬手帳に対する医療消費者の認知は向上していると考えられるが、他の診療科受診時や OTC 薬購入時等にお薬手帳を利用するといった active な活用がなされているかは不明である。そこで、薬局来局慢性疾患患者を対象に調査を行い、お薬手帳の質の高い活用促進に対する薬剤師の役割について検討した。

【方法】2011 年 9 月 6～22 日に東京、神奈川県内 6 薬局にて、継続処方がある来局者を対象に自記式質問紙を配布し郵送にて回収した。質問内容の構成は、属性、薬物治療に対する姿勢(5 項目)、薬局業務の認知(4 項目)、薬局における能動的行動(5 項目)とした。比較には Mann-Whitney 検定を行った。

【結果】調査票配布数 501 人、回収数は 372 人(回収率 74.3%)であった。お薬手帳の所有率は 70.7%(263/372)であった。手帳を所有していないと回答した者は 97 名、所有しているが薬局以外で利用していない者が 95 名、利用している者が 164 名であった。非所有者と非活用者の比較では、薬物治療に対する姿勢 2 項目において有意差がみられ、非所有者の方が positive であった。非活用者と活用者の比較では、薬物治療の姿勢 5 項目と薬局業務の認知 2 項目、能動的行動 5 項目で有意差がみられ、活用者の方が全ての項目において positive であった。

【考察】お薬手帳の所有者の約 4 割が、薬局以外で手帳を活用していなかった。非活用者は非所有者と概ね似た性質であり、活用者と比べ特に薬物治療に取り組む姿勢や薬局に対する能動的行動が消極的である性質がみられた。これらのことから、お薬手帳の積極的な利用が望まれる患者層において手帳の有効活用がなされていないと考えられる。薬剤師はこのような患者に対し、具体的な手帳の利用例を示すなど積極的に介入を行う必要があると考えられる。